1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0891200115		
法人名	社会福祉法人幸清会		
事業所名	グループホーム来夢の杜太田(あじさい)		
所在地	茨城県常陸太田市上河合町字1527-1		
自己評価作成日	令和4年7月15日	評価結果市町村受理日	令和4年11月14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/08/index.php?action_kouhyou_detail_022_kihon=true&JigvovsCd=0891200115-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人いばらき社会福祉サポート
所在地	茨城県水戸市大工町1-2-3 トモス水戸ビル4階
訪問調査日	令和4年9月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ■情報の共有の仕方の工夫(明文化することや申し送りや回覧するようにしている) ■利用者に寄り添ったケアをするための会議や研修の定期的な開催 ■道の駅に作品を飾ってもらうことで、地域との繋がりを深めている ■四季を感じてもらおう工夫としての作品作りや、旬の食材を使った食事の提供など ■職員同士が入居者のケアについて話しやすい環境にあること ■コロナ禍にあっても、家族との関係を閉ざさないよう、面会やお便りお電話などを通して繋がりを大切にしているところ ■優しい職員に囲まれて、入居者が安心して生活していること
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は住宅地に位置し、周辺にはコンビニや道の駅があり、施設からは田畑や山の景色を眺めることができ、四季を感じながらゆったりとした生活ができる環境にある。施設長と職員は理念でもある「ただいま」「おかえり」と声をかけ合えるような温かい家庭的な雰囲気や大切に支援に取り組んでいる。現在コロナ感染症予防の為に外出を自粛しているが公用車で個別支援を行うとともに、職員は毎日のレクリエーションを工夫して利用者がコロナ禍でも生き生きと生活できるよう支援をしている。コロナ感染症対策を徹底して運営推進会議を開催し、市職員や地域住民、社会福祉協議会担当者、消防署員、警察署員の専門的な立場からの参加を得て、様々な情報やアドバイスを受けて運営に反映させている。看取りをする事業所であり、非常勤看護師や協力医療機関との連携で利用者や家族等にとって安心して委ねることができる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎日、昼礼で法人の理念を唱和することで、理念を意識して働けるようにしている。また、理念にある専門的な知識と技術を身に着けるため、事業所として毎月1度の内部研修を実施し、質の向上に努めている。	毎年年度初めに事業計画を見直し時に、理念についても話し合っている。家庭的な雰囲気気を大切にしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	道の駅ひたちおおたに、来夢の杜太田の入居者の作品を飾らせていただいている。毎月1回入れ替えを行っている。コロナ禍で日常的な交流は難しいが、広報誌なども掲載することで、グループホームに入居者している方の生活の様子を伝えている。今年は初めて、道の駅側から入居者の皆さんに作品の作成依頼が来た。自分たちが作った作品を見に行き、道の駅スタッフの方に直接挨拶することもできた。	自治会に加入している。コロナ禍前はボランティアや中学校の職場体験の受け入れを行ったり地域の鳥追い祭りに参加した。道の駅ひたちおおたに利用者の作品を飾ったり、道の駅からの依頼を受けて七夕の飾りつけをしたりして交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	居宅介護支援事業所が併設でないが、施設を利用するための相談などの連絡が来ている。また、施設に出入りしている業者の方からご家族の介護の相談を受けたり、地域のセブンイレブンの店長さんからご家族やお客様の介護の申請や介護サービスについて相談をうけ、福祉用具の業者を紹介するなど、来夢の杜太田として構築してきたネットワークをフル活用し、地域の方が安心して生活を続けられるようアドバイスをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染対策のため中止することもあったが、感染対策を講じたうえで実施している。運営推進会議には、行政、消防、警察、自治会副区長、地域住民、入居者家族などに参加して下さっている。事業内容や日常生活の様子だけではなく、事故報告や苦情等についても報告し、参加者から助言を伺って、事業運営に活かしている。開催中止となったときには資料を送付している。	市職員や地域包括支援センター職員、民生委員、警察署長等が委員となり、施設内で感染症対策を徹底して、2ヶ月に1回会議を行っている。委員から施設に防犯カメラ設置の意見があり話し合いを行った。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	常陸太田市の担当者や地域包括支援センター・社会福祉協議会の担当者は、運営推進会議に必ず参加してくださっており、入居者の相談から、職員確保の件、困難事例等についても相談できる関係性を築けている。水害想定避難誘導訓練に関しては、消防・市役所、避難先である小学校と連携を図って対応することとしている(8月22日に計画していたが延期となってしまった。再調整予定)	職員、包括支援センター、社会福祉協議会担当者が運営推進会議に毎回出席しているの、困難事例等気軽に相談できる関係にある。生活保護受給者がいるので、月1回社会福祉協議会担当者が来訪している。管理者は市担当者とメールや電話、アプリで連絡を取り合っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関する研修は年2回以上の開催が義務付けられているが、開催だけでなく、昨年度に引き続き今年度に関しても全職員が2回以上身体拘束の研修に参加できるように計画し意識を高めるよう努めている。2回のうち1回はユニット会議の時間を活用し開催しており、少人数での研修を行うようにすることで、参加率を高めるだけでなく、ユニット独自の課題を話しやすい環境での研修を取りれた。法人本部からも身体拘束等の注意喚起の連絡が入るため、昼礼を利用して情報提供を行っている。法人の取り組みとしての虐待の芽チェックリストを行うことで、身体拘束に結びつく前の不適切なケアに対して何をすればいけないかと明確にすることで職員の意識づけを行っている。玄関は段差があり危険なため施錠しているが、ユニット玄関は施錠することなくいつでも自由に隣のユニットに遊びに行けるようになっている。	身体拘束排除のための委員会を設置し、指針を作成している。内部研修会を年2回実施し、その中の1回は各ユニット会議をし、全職員で身体拘束をしないケアに取り組んでいる。身体拘束は行なっていないが、万が一に備えての書類を整備している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者も現場に入ることで、職員と入居者の関係性などを自分の目で見て確認している。また、管理者は職員に対して不適切と思われる状況を目にした時にどのように行動するべきかをアドバイスすることで、職員同士が抑止力となる体制作りをしている。北海道のむかわ町における、精神的虐待の事例を引き合いに出し、入居者に対しての声掛けなどを注意するよう注意喚起を定期的に行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設内に権利擁護の資料を掲示している。制度に関しての情報等については、分かりやすい資料を職員回覧することで、理解を深められるよう工夫している。日常生活自立支援事業を活用している入居者はあじさいにはいない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居や解約の際には時間をかけて契約書や重要事項説明書の内容を補足説明をしながら分かりやすく説明するよう努めている。入居後の介護報酬改定等の際にも、入居者・契約者に対して説明を行い、理解を得て同意を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議のメンバーには、それぞれのユニットのご家族代表の方が含まれており、ご家族が運営に関して意見が述べられるようになっている。運営推進会議で話し合われたことを昼礼の場で報告したり、申し送りとして回覧するなどし、参加していない職員にも情報をできる限り共有するようにしている。	予約制で玄関での面会対応を行ない、なるべく家族等が足を向けられるようにしている。毎月手紙と広報誌を送付し、メールで連絡を取り合うなどして、信頼関係を築けるように努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、ユニット会議を開催し、職員同士で意見交換を行い、意見や提案を聞き取りを行っている。賞金に関することや、会議の日程なども職員の意見を取り入れながら柔軟に変更して行っている。またユニットで使用する物品（血圧計・ペーパータオルなど）など、細かなこともすべて職員の意見を取り入れながら行っている。ユニットの1日の流れ等もユニット会議で職員ひとりひとりの意見を聞き入れながら変更を重ねている。	毎月ユニット会議を開催し、意見や提案を聴いている。課題が上がるごとに、随時、職員アンケートを年数回実施している。職員一人ひとりの意見を管理者が確認している。職員からの提案で朝の体操の時間を午後に変更し、職員の負担や利用者の安全とスムーズな支援を行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年度初めに、職員の職種や経験年数などを勘案して、個別に法人に対して昇給交渉を行っている。非常勤職員の勤務時間を柔軟に変えることで、仕事と家庭を両立しやすい環境を整えたり業務に偏りが出ないように注意している。逆に、職員の性格などを見極め時間や曜日を固定することでその時間の業務に専念できるようにする環境を整えることもある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月1回内部研修を企画し計画的に学ぶ機会を作っている。また、法人内で計画されているzoomを活用したオンライン研修への参加にも力を入れており、職員が学びたいテーマや必要と思われるテーマに申し込みをし、勤務調整を行うことで、学びの場を確保している。また法人の、研修参加費助成金を活用することで、有償の研修にも個人の負担を減らしながら参加できるようにしている。職員の希望などを確認しながら、無理強いせず業務の幅を広げていけるようにしている。管理者と一緒に新しい業務（病院受診など）を行うことで、新しい業務にも安心して就けるよう丁寧な教育を心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	zoomを活用することで、オンラインを活用して研修に積極的に参加するようにしている。今年度は、栗田病院より講師を招き、病院での認知症ケアの困難事例の取組などを学ぶ機会を作った。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の事前面談・調査を行い、入居者の生活状況を把握し、個々の意向やこだわりをくみ取り、入居者の生活の継続性と質が保てるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	早い段階でご家族が連絡をとりやすい手段を確認し、場合によってはLINE等で気軽に相談ができる体制を構築している。入居当日又は入居翌日には、必ず初日の様子をご家族にお伝えするようにしている。個人情報NGのご家族が増えていることから、個別でご家族の写真などを送りながら、元気な様子をお伝えしつつ、ご家族が安心できるよう努めている。いつでも連絡がとれる状況を作ることで、ご家族が意見しやすい関係性を構築している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前調査を行う際、独自の聞き取りシートを使って、ご本人や家族とのこれまでの生活歴やこだわりを伺って、必要としている支援を明確化し、ご本人の意向に沿った生活支援に繋がられるように工夫している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の個々の状況を勘案し、日常生活の中で共に時間を共有し合い、楽しんで生活できるよう関わりを持っている。例えば、洗濯物を一緒に干したり、台所の片づけ、食卓テーブルを拭いたりしている。特に、洗濯物量は大人気であり、本当に職員よりもきれいに畳んでくださっているのので、感動と心からの感謝の気持ちを伝えることで、やりがいにもつながっているように感じる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ユニットへの立入は制限をかけたままだが、玄関先で感染対策を講じて面会ができるようにしている。終末期の場合は、特別に居室への立入を許可し、最期の時を職員と家族が協力しながら入居者を支えられるようにしている。生活の様子を月1回の居室担当者からのお手紙で伝えたり、病院受診の結果についても必ず報告をすることで、離れていてもご家族の状況や変化を把握できるよう努めている。写真NGIにより、広報誌に掲載できない入居者の家族に対して、その方専用の広報誌を作り郵送することで、会えなくても生活の様子が伝わるように配慮するようになった。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	病院受診に関しても、協力医療機関はあるが、ご本人やご家族の意向を尊重しこれまでの医師との関係性が継続できるように限り主治医を変えない配慮を行っている。	基本情報で利用者の友人関係などを把握している。職員は手紙や電話の取り次ぎなどの支援をしている。お墓参りや自宅への外出などを行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の性格や相性などを慎重に観察し座席の配置を工夫している。場合によっては、数か月かけ座席の配置変更を試みることもあった。耳が聞こえない入居者がいるため全体を見渡せる場所に配置することで、孤独を感じることがないようにした。見守りが必要な入居者は逆に職員の近くに配置したり、テーブルの位置も職員が食事を作りながらも見守りをしたり、入居者の会話に入れるような場所に配置しなおした。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された後も、ご家族との連絡手段は残してあり、LINEやメール等お互いが負担にならない方法により、その後の行政手続きについての相談に応じたり、ご親戚の介護についての相談に応じるなど、相談しやすい関係性を大切にしている。病院への長期入院等により退居された入居者家族に対しては、負担にならない程度にLINE等を活用し状況を伺うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	独自のフェイスシートを活用し、今までの生活状況や意向、こだわりを把握・理解し、居心地よく生活できるよう努めている。また、意向を伺えないときは、今までの生活歴などから意向をくみ取る努力をしている。	表情をこまめに観察したり、利用者の話しを丁寧に聞いたり独自のフェイスシートを作成し、利用者の意向やこだわりを把握して全職員で共有を図っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の事前調査を大切にしており、生活環境を確認し、ご本人の生活歴など細かな情報を聞き取りさせて頂いている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご本人の仕草や表情など日々のケース記録、職員同士の引き継ぎ、定期的なユニット会議で情報を共有しあい、ご本人の健康な能力が活かされるよう日常のケアに繋げている。また、暮らしの継続が図られるよう配慮している。グループホームで福祉用具をレンタルする場合は自費レンタルになってしまうが、必要な用品については、ご家族にその必要性をしっかりと伝えたくえで購入していただいている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的なユニット会議やケアカンファレンスにて入居者個々の状況を共有することで、同じ目標に向かってケアを提供できるようケアプランに反映させている。シフトによって、顔を合わせる機会の少ない職員もいるため、業務申し送りノートとは別に入居者申し送りノートがあるため、記入することで職員同士の情報共有を行っている。	担当職員がカンファレンスで全職員の意見を聴き、作成し立案した原案を家族等に確認している。3ヶ月ごとにモニタリングを行い基本1年で見直しを行っているが、退院時や変化があった場合には見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	排泄・入浴・食事量・水分チェックなどはケース記録とは別様式にし把握しやすいように工夫している。日々の生活状況はできる限り詳しくケース記録や申し送りノートの内容に記載するようにし、定期的開催するユニット会議で情報共有し、個々の意向が反映されたケアプランを作成し実践している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	シフトを作る際、ある程度の予定は立てているが、入居者の状況等に応じて変更はできるようにしている。隔週でセブンイレブンの買物もできるようにしており、それ以外の要望に関しては随時職員が必要なものを立替金で購入できるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	道の駅ひたちおおたが近くにあるので、四季折々の入居者の作品を飾らせてもらい、その飾られた作品を入居者が見に行く機会を作ることで、やりがいへとつなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関はあるが、ご本人やご家族の意向を尊重しこれまでの医師との関係性が継続できるように限り主治医を変えない配慮を行っている。ご家族の希望により、協力医療機関に変更する場合もある。	契約時にかかりつけ医への受診が可能なことを家族等に説明している。受診時は個人ファイルを持参し、医師とのやり取りをしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が、これまで行うことが出来なかった医療行為を施設内で行うことが出来ている。終末期での受入の場合は、ひたちおおみやクリニックの医師や看護師と連携し、お互い24時間連絡がとれるようにすることで、入居者の生活をサポートしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	事前に入居者の状況を家族に伝え、どのように対応すればいいか意向を把握して、入院となった際も主治医との面談には同席するようにし、ご家族の不安軽減に努めている。遠方のご家族の代わりに入院中病院への面会に行き、情報共有することで病院関係者との連絡を密にして関係性を築いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化の指針についても説明し同意をもらっている。終末期の関わりについては、ひたちおおみやクリニックの横山先生に主治医をかえて頂く必要があることなどを事前に伝えている。	状況の変化に応じた繰り返しの話し合いと、段階的な合意を行なっている。「終末期生活支援に関する考え方」を作成し、協力医療機関の連携も取れている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設長とは24時間連絡がとれる体制をとっている。救命講習に関してはコロナ禍であるためしばらく延期しているが、状況が許す時期が来たら講習を計画する予定。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年間計画を立て消防訓練を行っている。消防職員が毎回立ち会ってくれている。都度アドバイスをいただいている。水害時想定避難誘導訓練は、8月22日に計画していたが、クラスター発生により延期となってしまったが、峰山小学校と話し合い、生徒とかぶらない日程で再度調整をすることになっている、市役所も立ち会ってくれる予定。	夜間や地震、水害など様々な災害を想定した避難訓練を行っている。訓練後は反省会を行い課題について話し合っている。訓練には運営推進委員の地域住民の協力がある。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	尊厳を守り、自尊心を高められるよう、かつプライバシーに日頃から職員同士で不適切な声掛けとにならないよう注意し合い支援を行っている。例えば、虐待の芽チェックリストを活用して、ユニット会議の時に話し合いの場を設けている。	利用者の人格や誇りを損ねないように尊重し、話しを否定せず傾聴する支援をしている。「虐待の芽チェックリスト」を活用し、職員同士注意し合い、会議でも話し合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	いつも「わからない」「何でもよい」と言う方にも「どちらが良いですか」等着替えなどでも意思表示がしやすいよう説明を行い、個々の意思や意向に沿って選ぶなど、自分で意思決定できるように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	認知症の疾患別の特徴に配慮し、個々の生活パターンに合わせ、画一的にならないよう一日の生活を組み立て、ご本人のペースに合わせたケアを提供している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々の意向を把握し、家族の協力を得ながら、季節にあった身だしなみが自分の意思で整えられるように関わっている。毎朝着る服も、ご本人と相談しながら決めている。また、2か月に1回床屋さんさんが来ているが、新型コロナウイルスによる面会制限をかけている期間も、感染対策をしっかりと行い、生活エリアには立ち入らないことを条件にして、散髪は行っている。定期的に、衣類の破損やサイズなど現在ある衣類を居室担当者を中心に把握し、必要に応じてご家族に購入をお願いしたり、場合によっては職員が代わりに購入するなどし、入居者がいつも清潔な身だしなみでいられるよう配慮している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ヨシケイの食材を活用しているが、献立を見て調理の仕方をアレンジしたり、プラス1品加えたり、鶏肉が食べられない入居者や、甲殻類アレルギーをお持ちの入居者など個別対応が必要な入居者が複数いるため、代替えの食事は提供できるよう準備している。ご飯の炊き方についても、ユニット毎の入居者の好みの硬さに合わせて炊いている。毎日の食事作りを共に行える入居者はいないが、畑でとれた食材の下処理(豆の筋取りなど)を入居者に手伝ってもらって行うこともある。また、畑でとれた食材を使ったメニューを、入居者のリクエストで調理をすることもあった。	「季節を感じる献立」として月1回季節を感じる献立を1品利用者に提供している。土用の丑の日はうな重を取り寄せして利用者に提供している。季節ごとの行事食や近くの道の駅に外食やアイスクリームを食べに出かけるなど、食が楽しみとなるよう工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ヨシケイの食材を活用しているため、管理栄養士が立てた献立で食事を提供している。食事形態については、都度見直しを行い食材によっても提供の仕方を工夫している。お粥、ペースト、刻み、とろみなど入居者に合わせた調理方法で対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	市内の歯科と協力医療機関の契約を締結しなおし、訪問による無料歯科検診を実施。 必要に応じて、通院している。 認知症の症状により、日によってできるできない日があるため、声掛けの際の反応を見ながら、自分で行ってもらうときと職員が介助により行うなど対応を変え、本人が混乱しないよう努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ご本人の排泄状況をパターンシートに記入して、個人の排泄パターンを把握するようにしている。 また、安易に下剤を使用せず自然な排便が促されるよう、朝一番(朝食の前)に全入居者に牛乳を飲んでもらうようにしている。食事前などのトイレ誘導以外にも、入居者のパターンや動きを把握し、タイミングよくトイレ誘導することで、失禁を回避しトイレで排泄できるようになっている。	排泄チェック表から一人ひとりの排泄パターンを把握し、時間でのトイレ誘導をしている。 朝一番で牛乳を飲むなど、自然な排便ができるよう取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	安易に下剤を使用せず自然な排便が促されるよう、朝一番(朝食の前)に全入居者に牛乳を飲んでいただいている。また、毎日午後からラジオ体操を行い、体を動かす時間を確保することで自然な排便に繋がられるよう努めている。また、天気のよい日にはウッドデッキや敷地内を散歩するように心がけている。水分の摂取が少ない入居者に対しては、好みの飲み物や飲むタイミングなど細かく探り、臨機応変に対応方法を変えることで摂取量を増やし排便がスムーズにいくよう支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	午前・午後など個々の入浴時間のこだわりに合わせてタイミングをはかり、入浴を楽しんでいただいている。週2回の入浴を確保するため、基本的には入居者の入浴曜日は決まっているが、本人の意向や状態に合わせて、曜日を変更しながら支援している。また午前中声掛けをして拒否があった場合は、午後にはずらすなど、無理強いをせず気持ちよく入ってもらえるよう配慮している。数種類の入浴剤を用意し、ご本人の気分に合わせて使用している。	入浴は基本週2回以上、機械浴もあり利用者の状態に応じて使用している。入浴を拒む利用者に対しては午前中声掛けをして拒否されたら午後にもう一度声掛けするなど、決して無理強いをしないよう対応している。利用者の気分に合わせて入浴剤を使用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々のライフスタイルや生活習慣に合わせ、画一的な消灯時間、起床時間ではなく、その日の体調などの状況も踏まえて、状態に合わせて関わりをもっている。眠れない方は無理にベッドに入ってもらうのではなく、眠くなるまでリビングで過ごしてもらうこともある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	日本調剤薬局の薬剤師が週2回来訪し、薬の配達・配薬をしてもらっている。訪問時、服薬方法についての相談や副作用についての相談に応じてもらっている。また、薬剤師が直接主治医と話し、薬の調整も行ってくれている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事の用意や調理、掃除、洗濯など入居者個々の身体状況に合わせ、一緒に生活を楽しめるよう支援している。また、嗜好品に関しても、持病がある入居者に関しては主治医と連携を取り、対応している。認知症の方が楽しみにしている、食事から季節を感じていただけるよう「季節を感じる献立」として月に1度旬の食材を利用したプラス1品のおかずの提供をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気が良い日は、できる限りウッドデッキに出て過ごせるように関わっている。また、コロナの感染状況を見ながらドライブ外出なども行っている。	コロナ禍の状況下で外出は自粛しているが、公用車でドライブに行ったり、ウッドデッキで日光浴をしている。近くの道の駅へ買い物やアイスクリームなどを食べに出かけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知症の入居者同士のトラブル回避のため、お金の所持については控えて頂いている。本人の私物を購入する際などは、家族の了解を得て購入するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者が家族に連絡をしたい場合には、拒むことはせず、お家族の協力のもと、電話をかけることができるよう支援している。また、新型コロナウイルスの感染対策により面会ができない期間には、代わりにLINEのビデオ通話機能を活用している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	全居室に湿度・温度計を設置し、快適な環境に配慮している。職員の履くスリッパについても静音スリッパやクッション性の高い音が響かないものを使用してもらうようにしており、職員の話し声など入居者が不快にならないように配慮し、居心地のいい環境づくりに努めている。また、リビングなどに雑誌等を置き、いつでも見られるようにしている。また、職員の話し声や足音も不快にならないよう心がけている。新型コロナウイルス感染対策により、外出ができない代わりに、季節を感じることができるようてぬぐいを飾っている。	共用空間は明るく、加湿器、空気清浄機を設置している。リビングはテレビや大きなソファ、生花を飾り、寛げる空間を工夫している。利用者と職員で作成した創作物などが飾ってある。小上がりの畳の部屋がありソファや観葉植物を置いたり、洗濯物をたたんだり思い思いに寛げる場所がある。中庭にはウッドデッキがあり、外気浴が楽しめるようになってきている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングの中に、食事をする空間とひとりで洗濯物が畳めるスペースを作っている。入居者同士のトラブル回避を目的として、テーブルの配置を工夫し視界に入らないようにしたり、職員の近くに見守りが必要な入居者に座っていただくようにしている。テーブルの高さも、思い切って足を切り、入居者がしっかりと足が地面について安定した姿勢で座ることができるように配慮した。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際は、使い慣れた馴染みある家具を持ち込んでいただき、ご家族と居心地の良い居場所づくりをしている。場合によっては、新しい家に越した時と同じように新しい家具を買いそろえてもらい、新たな気持ちで生活がスタートできるように関わることもある。また、入居してからも家族や契約者の協力を得ながら、ご本人の身体状況の変化に対応した設えづくりを心がけている。	居室にはエアコンやベッド、洗面台、カーテン等が備え付けられている。家族等の協力の下に、利用者の使い慣れた品物を持ち込んで、利用者好みの居室づくりをしている。ベッドからの転落、転倒リスクのある利用者には、布団での対応をするなど 個別の状況に応じた支援を行う。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	職員は認知症の入居者が、安全かつ自立した生活が送れるよう、トイレのマークを使用したり、居室の名前を本人の目線に合わせた位置に設置するなど分かりやすく工夫している。トイレや浴室、玄関に応じて手すりを増設している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容